

187 猿長者（イ）

いっぺーんなー、おじーおばーが誠ぐわーたー
二人、居たくとう、また欲たー二人居たくとう、あり
やたんでい。

神様るやしが神るやんせーしが、うまんかい泊まら
ちやくとう、

「私ねーなー泊まるかたー無んくとう、雨だいやてい
ん、まーんかいやていんしむくとう泊まらちくいり」
んちやくとう、はじめー欲たーんかい行じやくとう、
あまんでえ、

「ならん」んちやくとう、神るやんせーしが、「うんぐ
とうー汚者のー泊みらん」ちやくとう。

また、誠たー所かい行じやくとう、いっぺーまじめ
ぬおばーたーんかい行じやくとう、泊みたくとう、
「なー、私たーなー貧乏るやしが、なー貧乏しなー、

たいそうな、お爺さんお婆さんが正直者たち二人、
居たそうだ、それにまた欲張りものたちが二人居た、
そうだよ。

神様であるが神様であられるが、そこにお泊めした
ので、

「私はもう、泊まるところがないので、軒下であつて
も、どこでもよいから泊めてくれ」とおっしゃったの
で、最初に欲張り者たちの家に行くと、むこうでは、

「できない」というと、神様だけど、「そんなきたない
者は泊めない」と言うので。

次に、正直者の所に行くと、とっても正直なお婆さ
んたちの所に行くと、泊めてもらえたので、

「もう、うちは貧乏だけど、もう貧乏でもう、敷物も

敷ちゆる物ぬん無んしが、うまんじ、泊まていゆたさ
み」んちやくとう、

「んー、あんししむんどー」んちやくとう。

神るやんせーせーやー、泊みんそーらちやくとう、
年ぬ夜やたんてい、

火正月すんでいさくとう、「私たーなー、御馳走んぬー
んねーらん、火正月さやー」んち、なー、物乞やーる
やんち思てーるばーてー、神るやんせーしが、物乞す
がいるそーんせーくとう。

「いーあんししむさ、あんしいったーなー御馳走ん無
んなー、」んちやくとう、

「無ん」ち。

「あんせー私が、御馳走出じやち食まさやー」んちや
くとう。

「とーあんせーいたーや、若くないしとう、御馳走食
むしとう、どうりがまし」んちやくとう、

「若くないせーまし」んちゃんてい。

無いが、そんなところで、お泊まりになってもよいの
ですか」と言うとう、

「はい、それでいいよ」と、おっしやうて。

神さまであるから、お泊まりになられたので、大年
の夜だったので、

火正月をしようと、「私たちはもう、御馳走も何も無
いから、火正月をしよう」と、もう、乞食だと思つた
んだよ、神さまだが、乞食のかっこうをなさっている
ので。

「うんそれでよい、それで、あんたたちは御馳走も無
いのかね」とおっしやうと、

「無い」と。

「そんなら私が、御馳走を出してあげようね」と、おっ
しやうたそうた。

「さあそれではあんたたちは、若くなるのと、御馳走
食べるのと、どっちがよいのかね」と問うと、

「若くなるのがよい」とおっしやうたそうた。

「とーあんせーなー、大鍋んかい湯沸かせー。うりん
かい夫婦浴みり」んちやくとう、いっぺー誠ぐわーた
ーけー浴みたくとう、なー白髪生とーし無んない、
二人若くなたくとう、あんさーに鍋ぬ無んたくとう、
隣ぬ欲ばーばーたーから、借てい来えーくとう、うぬ
四枚鍋えー、あんしうり持つち行じやくとう、
「何んち、いったー、あんし若くなとうが」んちやく
とう。

「はーなー、ひちぬみじしらん人なー、泊みんそーら
ちやくとう、あんし湯風呂入ちやくとう、私たー若く
なとーんどー」ちやくとう。

「だーあんせー、うぬ人おー、なまーめんせーみ」ん
ちやくとう、

「なま出じてい去みせーたんどー、」んちやくとう、
欲深ぬおじーおばーが、

「だーまーんかい去いたが、私たーん呼びやーに、私
たーん若くなら」んちやくとう、かーまんかいるめん

「さあそれでは、大鍋にお湯を沸かしなさい。それで
夫婦とも浴びなさい」と言うので、とっても正直な者
たちはさつと浴びると、もう白髪の生えていたのもな
くなって、二人は若くなつたので、それで鍋が無かつ
たので、隣の欲張り爺さんたちから、借りていたので、
そのシンメー鍋を、返しにとそれでそれもつて行くと、
「何んで、おまえたちは、そんなに若くなつたのかね」
と問うので、

「あの、まったく見ず知らずの人を、泊まつてもらう
と、するとお風呂に入ると、私たちは若くなつてしまつ
た」と言うとう。

「だあそれで、その人は、まだおいでになるのかね」
と言うとう、

「いま出て行きましたよ」と言うとう、欲深のお爺さん
お婆さんは、

「だあどこに行つたのかね、私たちも呼んできて、私
たちも若くしてもらおう」と言つて、ずっとむこうに

せーしが、うれー神様、呼び止みやーに、
「私たーん若くなちくいみそーり」んち。

「とー、あんせー、いったーん湯沸かせー」んちやく
とう、湯沸かちやくとう、湯沸かち浴みたくとう、猿
なとーたんでい、二人欲深、猿なとーたんでい。

あさくとう、欲深ぬ猿なくとう、あんすくとう、
猿や欲んちよーん。さくとう、神様がる、人間ないし
る猿なちよーたんでいどー。

あんさくとう、また、みぐていめんそーちよーたん
でい。うぬおじーが、神様ぬ、めんそーちやくとう、
「毎日うまかい来、二人までいぴーぴーしなー、食
物どう食まちよーんでー」んちやくとう。

「とーあんやらー、うぬ黒石焼けー」んでい、黒石焼
ちやくとう、うりんかい座くとう、焼ちやくとう、尻
焼ち、赤尻なたんでい。

やくとう、猿や欲、誠や世万代んでい。

いるが、その神さまを、呼び止めて、
「私たちも、若くしてください」と。

「それでは、あんたたちも、お湯を沸かしなさい」と
言うので、お湯を沸かすと、お湯を沸かして浴びると、
猿になったそうだと、二人の欲深者は、猿になったそう
だよ。

それで、欲深が猿になったので、だから猿は、欲深
いと、だから、神さまが人間になるのを猿にしたとい
うことだよ。

それで、また、まわって来たそうだよ。そのお爺さ
んが、神さまが、おいでになったので、

「毎日そこに来て、二人ともぴーぴーと鳴くので、食
べ物をあげているんですよ」と言うと、

「そんなら、その黒石を焼きなさい」と、黒石を焼い
てそれに座つたので、焼けたので、お尻を焼いて、赤
尻になったそうだよ。

だから、猿は欲張り、正直は世の万代までと言う。